

テーマ：景気動向指数（2014年5月）

発表日：2014年7月7日（月）

～5月も改善はみられず～

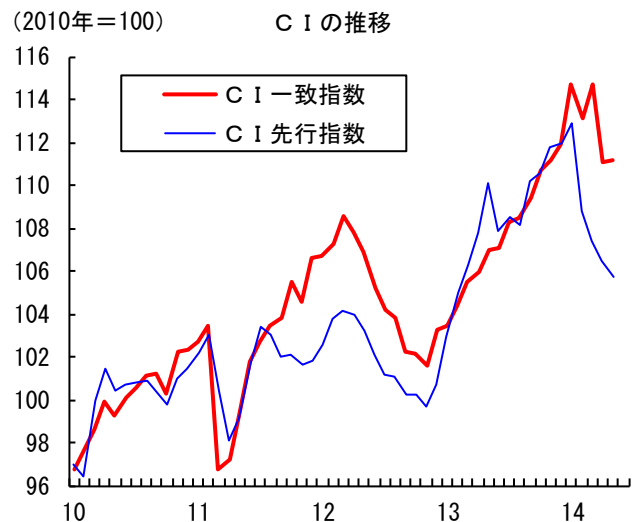
第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

○ 5月も改善はみられず

内閣府から公表された2014年5月の景気動向指数では、C I一致指数は前月差横ばいとなった。駆け込み需要の反動により4月に前月差▲3.6ポイントと落ち込んだ後だけに、5月は反発が期待されていたが、実際には改善が見られなかった。5月の段階でも反動減の影響は色濃く残っている模様であり、期待外れの結果と言えるだろう。駆け込み需要が大きかった分、反動減もかなりの大きさとなっており、4-6月期の実質GDP成長率は相当なマイナス成長が避けられない状況だ。

5月の内訳では、小売業販売額や卸売業販売額がプラス寄与だったが、耐久消費財出荷指数、投資財出荷指数等が下押しになった。

先行指数も冴えない。5月のC I先行指数は前月差 ▲0.8ポイントと、4ヶ月連続で低下した。2月に同▲4.1ポイントの急低下となった後も、下げ止まりはまだ確認できていない。内訳では、消費者態度指数や中小企業売上げ見通しD.I.が反発したものの、最終需要財在庫率指数や新設住宅着工床面積による押し下げが大きかった。先行C Iの低下が続いていることは、先行きの景気に対する不透明感の強さを示す一つの材料である。特に、在庫関連の指数が悪化していることは気にかかる。



(出所)内閣府「景気動向指数」

○ 基調判断は「足踏み」が継続

内閣府によるC I一致指数の基調判断は、「足踏み」だった。4月に「改善」から「足踏み」へと下方修正されたが、5月も「足踏み」判断が継続されている。なお、内閣府による「足踏み」の定義は「景気拡張の動きが足踏み状態になっている可能性が高いことを示す」である。現在のところ、あくまで駆け込み需要の反動減の影響が大きいが、仮に今後、反動減からの戻りが予想以上に弱く、何らかのショックで一段の落ち込みを見せるような場合には、「下方への局面変化」への更なる下方修正、ひいては景気後退局面入りの可能性も否定できなくなる。

筆者は、①経済対策効果で公共投資が高水準を維持すること、②輸出の増加が見込めること、③景気回復の波及により設備投資が好調に推移すること、④雇用・賃金の改善が見込まれることから、2014年度も景気回復局面が維持可能と予想しているが、反動減からの消費持ち直しペースについては不透明感が大きいので、警戒が必要なことは間違いない。予断を持たずにデータを確認していく必要があるだろう。